

アン・サッカレー・リッチー作品における
「眠り姫」たちと女性による人生の探求

矢 次 綾

松 山 大 学
言語文化研究 第37巻第2号（抜刷）
2018年3月
Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 37 No. 2 March 2018

アン・サッカレー・リッチー作品における 「眠り姫」たちと女性による人生の探求

矢 次 綾

1. リッチー作品における「眠り姫」

アン・イザベラ・サッカレー・リッチー (Anne Isabella Thackeray Ritchie, 1837-1919) のフェアリー・テイル・フィクションの顕著な特徴は、同時代を生きる人々の物語として設定されている点であろう¹⁾。リッチーは、彼女が出版した最初のフェアリー・テイル・フィクション、「森の眠り姫」(“The Sleeping Beauty in the Wood,” 1866) の冒頭で、語り手の一人に、「お伽話は実在の人間がお姫様や王子様に喩えられて語られたものに過ぎない。お伽話はどこにでもいつでも存在するのだ」(“Sleeping Beauty” 8) と発言させることによって、その点を明示している²⁾。リッチーは、お伽話を再話しながら、同時代の女性たちが直面する問題を提示していると考えられる。例えば、「森の眠り姫」や、それに続けて『コーンヒル誌』(*The Cornhill Magazine*) に寄稿した「シンデレラ」(“Cinderella,” 1866) で提示されている問題は、女性の自己実現が往々にして妨げられていることである。

「シンデレラ」のヒロイン、エラ (Ella Ashford) はダンスに情熱を注ぐ少女として造形されているが、ダンスは、男性の場合と比較して著しく限定された選択肢から、彼女が選び取ったものである。この点について、リッチーは次のように述べている。

Some girls have a passion for dancing — boys have a hundred other ways and means of giving vent to their activity and exercising their youthful limbs, and putting out their eager young strength ; but girls have no such chances ; they are condemned to walk through life for the most part quietly, soberly, putting a curb on the life and vitality which is in them. They long to throw it out, they would like to have wings to fly like a bird, and so they dance sometimes with all their hearts, and might, and energy. (26)³⁾

厳密に言えば、エラの問題は、選択肢が限られていることというよりも、情熱を表現する場が著しく限定されており、それがさらに限定されていくことにあまる。すなわち、エラにとって、野原は存分に踊ることのできる唯一の場であったのだが、従来のシンデレラよろしく、父親の再婚によって家庭内でのエラの地位が著しく低下していくのに伴い、独りで野原に行くことを許可されなくなる（“Cinderella” 26）。その結果、エラは心身ともに抑圧され、閉塞感を深めていくのである。

ザイプスは、リッチー版「シンデレラ」を、ペンバートン（Harriet L. Child-Penberton, 生没年不明）の短編小説「すべては私の行くこと」（“All my Doing,” 1882）と合わせて、「ヴィクトリア朝のお伽話における女性の自己卑下（female self-deprecation）の好例」（Zipes xxvi）と見なしている。エラが苦境に甘んじており、積極的に現状を打破しようとしているとは言い難いことから判断すれば、ザイプスの分析は的を射ていると言えよう。しかしながら、リッチーが、上に引用したように、女性も男性同様の情熱とエネルギーを保持していると主張しているのに加え、情熱を表現するエラの姿がチャールズ（Charles Richardson）の心を捉え、ハッピー・エンドに至る要因であることを考慮すれば、リッチーは女性が自分を卑下している様子を描いているのではなく、女性が自己表現する重要性を主張していると考えられる。また、リッチー自身が「男女間の不平等に対する疑問」と不満を抱いており、そのような思いを、十

代の頃、父サッカレー（William Makepeace Thackeray, 1811-63）の友人、ミセス・ファンショー（Mrs. Farnshawe）に宛てた 1855 年 6 月頃の手紙の中で表現している（Shankman 32）。つまり、リッチーは、「ああ、自分が男だったらいいのに。私は職業を持ちたくて仕方がないのです。編み物をしたり繕い物をしたり、ただ小説を読んだりなんてしたくないのです」と述べ、自分が女性であることに對する不満を吐露している。この点を考慮するなら、マッケイが主張しているように、リッチーは「シンデレラ」の中で、女性の自己表現の場が限定されていることについて、「周辺部からの社会批判」（MacKay 65）を行っていると考えerべきであろう。

リッチーはエラの場合に見られるような情熱を持ちさえしていない女性の姿も、複数の作品中に書き込んでおり、彼女たちの多くが自分たちの置かれた状況に不満や閉塞感を持ちさえしていないことの方が、問題は大きいと示唆しているように見える。そのような女性の一人が、「森の眠り姫」のヒロイン、セシリア（Cecilia Lulworth）である。セシリアは茨ならぬ壁に囲まれたラルワース・ホールからほとんど出ることなく生活し、「人生経験が乏しいという点において、無知である点において、大人しいという点において子供同様」（“Sleeping Beauty” 11）の 25 歳の女性と設定されている。リッチーはセシリアがそのような状況に不満を持たない理由を、自分が過ごしているような人生以外の人生について知らないためだと説明し、その背景として、セシリアが母親、ミセス・ラルワースの悪影響を受けていることを匂わせている。例えば、ミセス・ラルワースはセシリアに、結婚に対する悪印象を植え付けている。人生経験に乏しく、精神的に未熟であるために十代の少女にしか見えないセシリアが 25 歳だと聞かされて、後にフェアリー・ゴッドマザー的な役割を果たす大叔母、ミセス・ドーマー（Mrs. Dormer）が驚愕し、セシリアは「とっくの昔に結婚しておくべき年齢なのに」（13）と無意識的に言ったとき、ミセス・ラルワースは「伯母様、お願いですから、そんなことをおっしゃるのは…」と言葉を挟む。その言葉を遮ってセシリアは次のように述べるのである。

“I don’t intend to marry,” said Cecilia, peeling an orange, and quite unmoved, and she slowly curled the rind of her orange in the air. “I think people are very stupid to marry. Look at poor Jane Simmonds — her husband beats her; Jones saw her.”

それに応えて、ミセス・ドーマーが「昔の若い女性はそんなに賢く育てられなかった」と言っているが、彼女が奇妙に声を抑揚させ、大きな溜息をついている様子を書き込むことによって、リッチーはミセス・ドーマーも、作者である自分自身も、セシリアが「賢く」育てられていると思っていないことを暗示している。既述したように、リッチーは十代の頃に、結婚して主婦になるという社会によって規定された女性の生き方への反発を表現していた。また、「青髭の鍵」(“The Bluebeard’s Keys,” 1874)では、「破談になったことが幸福な結婚話」(223)を描き、結婚が必ずしも女性に幸福をもたらすわけではないという考えを示した⁴⁾。ただし、「青髭の鍵」のヒロイン、ファニー (Fanny de Travers) の婚約破棄が幸福な選択と解釈できるのは、彼女がバルビ侯爵 (Marquis Barbi) を愛していないのではないかと、彼女の姉もしくは妹のアン (Anne de Travers) が疑念を表現している (212) ように、婚約は自分の意志で行ったものでは必ずしもなかったが、婚約破棄は、ファニーが自分自身で選択したものだったからである。一方、「森の眠り姫」のセシリアは、結婚という、人生を左右する問題であり、女性の成熟と関連していると通常は考えられる問題から、親によって遠ざけられている。その様子は、従来の眠り姫が、指を傷つけて死なないようにという理由で、王や王妃によって、紡ぎ車や錘から遠ざけられているのとはよく似ている。紡ぎ車で糸を紡ぐのは成熟した女性の仕事であり、錘で指を刺すことは、成熟した男女の性的な接触を示唆していると解釈するならば、眠り姫は親によって、女性として成熟することを妨げられていると解釈できるからである。以上の類似性から、セシリアはヴィクトリア時代の「眠り姫」と見なされ、「蕾を開かせることなく押しつぶされるか、摘み取られているか

のよう」(“Sleeping Beauty” 11) だと描写されていると考えられる。

マッケイは、『創造的に否定する —— 女性による人生探求のヴィクトリア朝における4つの実例』(*Creative Negativity: Four Victorian Exemplars of the Female Quest*, 2001) において、リッチーを含む4人のヴィクトリア朝の女性たちが、「女性の生き方や、女性に関する物語をいかに再構築したか」(MacKay 1) について分析しているが、未来の夫フランク (Frank Lulworth) に会う以前のセシリアが比喩的な「眠り」の中にいたのは、結婚問題に限らず、自分がいかに生きるべきかについての探求 (quest) をいまだに行っていたことがないためである。そのように考えるなら、「森の眠り姫」の語り手の一人で未亡人の H. によって、⁵⁾「愚かで疑い深く、狭量なひねくれ者で横柄」(10) と否定的に描写され、人生について探求した結果ではなく「見栄のために結婚した」ミセス・ラルワースも、結婚と出産を経験しているとはいえ、「眠り」続けているとリッチーは見なしえていると言えよう。その傍証であるかのように、ミセス・ラルワースは、自分がセシリアに施しているのと同じ教育を受けたと設定されている。リッチーは、ミセス・ラルワースが、彼女のガヴァネスの娘で、「神経質で優柔不断で陰鬱で心配性」のミス・ボウリー (Maria Bowley) と共にセシリアに施した教育について説明するときに、彼女たちが「自分たちが受けた教育よりもよりよい教育を知らなかったので、自分たちが育てられたのと同じやり方でセシリアを育てた」と述べていた。すなわち、ミセス・ラルワースは自分がセシリアの成熟を妨げているのと同じ教育を受け、しかも、それ以外の教育について知らなかったのであり、フランクに出会う前のセシリア同様の「眠り姫」のまま結婚し、母親になったと解釈できるのである。

リッチーは、ミセス・ラルワースがミス・ボウリーと共にセシリアに施した教育を、次のように叙述している。

A great many people think there is nothing in the world so good for children as scoldings, whippings, dark cupboards, and dry bread and water, upon which

they expect them to grow up into tall, fat, cheerful, amiable men and women ; and a great many people think that for grown-up young people the silence, the chillness, the monotony, and sadness of their own fading twilight days is all that is required. Mrs. Lulworth and Maria Bowley her companion, Cecilia's late governess, were quite of this opinion. The themselves, when they were little girls, had been slapped, snubbed, locked up in closets, thrust into bed at all sort of hours, flattened out on backboards, set on high stools to play the piano for days together, made to hem frills five or six weeks long, and to learn immense pieces of poetry, so that they had to stop at home all the afternoon.

(10)

この引用は、「森の眠り姫」という物語の枠から逸脱し、リッチーが前時代的と考える厳格すぎる教育を批判したものと解釈することも可能であろう。初めて出版した作品「小さな学習者たち」(“Little Scholars,” *The Cornhill*, May 1860. 後に改訂されて, *Toilers and Spinsters And Other Essays* [1874] に収録) の中で、スピタルフィールズのスラム街の子供たちの教育について考察して以来、リッチーは教育問題に強い関心を抱き続け⁶⁾、女性が人生について探求するためには適切な教育が必要という信念を、「森の眠り姫」のヒロインが受けた教育について述べる際にも表明しているのである。

興味深いことに、『ブラックスティック・ペーパーズ』(*Blackstick Papers*, 1908) に収録されたエッセイであり、ブライトン近郊にある 1885 年創設の女子パブリックスクール、ローディーーン校 (Roedean School) を称賛して執筆した「ブライトンのエーゲリア」(“Egeria in Brighton”)において、リッチーは、彼女が女子教育の停滞期と見なす 18 世紀末以前を、「眠り姫がうとうとしていたであろう」時期と表現している⁷⁾。

Education, exhausted by her long efforts, may have nodded off, as the Sleeping Beauty did, towards the end of the eighteenth century, under the spells of the droning wheels of Mrs. Chapone, Hannah More, and Mrs. Trimmer. Then the great revival occurred, and Rousseau and the Edgeworths and others stepped forward to shake up the sleeping Princess of Education. (74)⁸⁾

女性の指南書 (conduct book) を出版したミセス・チャポソ (Hester Chapone, née Muso, 1727-1801), 宗教に根差した教育論を展開した慈善家, ハナ・モア (Hannah More, 1745-1833), 児童文学者で教育改革者でもあるミセス・トリマー (Sarah Trimmer, née Kirby, 1741-1810) といった 18 世紀の教育における著名人を, 教育に「停滞という呪縛」(the spell of the droning wheel) をかけたとして, リッチーは非難している。そして, 「呪縛」を解き教育を進化させた, すなわち, 生徒たちを「目覚め」へと導く教育を提唱した人物として, ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-79) や『実用教育』(Practical Education, 1798) を執筆したエッジワース父娘 (Richard Lovell Edgeworth, 1744-1817 and Marie Edgeworth, 1768-1849) を挙げている。エーゲリアは「生命を与える者として呼び起こされた女教師」を含意しているが, リッチーは, ローディーンを, 「教育を司る姫が目覚めた」(77) 場所であり, 少女たちを「目覚め」させる場所と見なしているのである。18 世紀から 19 世紀にかけてのイギリスにおける教育についてのリッチーの見方を評価することは, 本稿では行わない。リッチーが, 教育そのもの, もしくは教育を施す側も「目覚め」を迎えてこそ, 知的な刺激を生徒たちに与えることが出来るという考えを提示している点, その際に比喻として「眠り姫」を使用している点に着目する。そうすることを通して, 娘セシリアに知的な刺激を与えることが出来ないばかりか, 成熟するのを妨げている不能な教育者の母親ミセス・ラルワースが, リッチーから見れば, いまだに「眠り」続け「目覚め」を迎えていないという解釈を裏書きすることがで

きるからである。

以上より、リッチーは「眠り姫」という用語を、人生について探求する以前の未成熟の女性を呼ぶ際の比喩として使っていると言える。また、リッチーは、ミセス・ラルワースを批判的に描写しながら、結婚や出産を経験していても必ずしも女性として「目覚め」ているわけではないという考えを示している。確かに、セシリアは、従来の眠り姫よろしく、フランクとの結婚というハッピー・エンドに達するが、リッチーが「彼女は目覚めた」(19)と語り手の口を借りて叙述しているのは、彼女がフランクに対してそれまでの非礼を詫び、ミセス・ラルワースとミス・ボウリーが制するのを振り切ったときである。すなわち、セシリアにとって、母親の悪影響という悪しき「眠り」から脱し、自分自身の人生を探求し始めたことが「目覚め」なのである。リッチーは、フェアリー・テイル・フィクションに分類されない長編小説においても、また、「眠り姫」という用語を使用していなくても、ミセス・ラルワースと同様の「眠り」続けている母親たちや、セシリアのように「目覚め」るチャンスを与えられた若い女性を描いている。次章以降で、そのような女性登場人物をさらに吟味し、女性の「眠り」と「目覚め」についてのリッチーの考えをさらに分析したい。

2. リッチーの長編小説における女性の「目覚め」

「ブライトンのエーゲリア」においてリッチーは18世紀末を境にして、教育界には「停滞という呪縛」をかけたミセス・チャボンやハナ・モアたちと、その「呪縛」を解いて教育を進化させたルソーやエッジワース父娘という、二つの世代が存在したという見方を示していた。リッチーは「森の眠り姫」に、母親になっても「眠り」続けているミセス・ラルワースと、「目覚め」を迎え、フランク・ラルワースと結婚したセシリアという二つの世代を書き込んでいた。このように、「眠り」続けている旧世代と、「目覚め」のチャンスを与えら

れる新世代という二つの世代を、リッチーは、最初の長編小説、『エリザベスの物語』(*The Story of Elizabeth*, 1862-63)でも描いている。この小説は、「目覚め」る可能性を持つヒロイン (Elizabeth Gilmour) についての以下の描写から始まる。

This is the story of a foolish woman, who, through her own folly, learnt wisdom at last; whose troubles — they were not very great, they might have made the happiness of some less eager spirit — were more than she knew how to bear. The lesson of life was a hard lesson to her. (5)⁹⁾

エリザベスが遭遇する困難とは、思慕の対象であるサー・ジョン (Sir John Dampier) の誘いに乗って劇場に出かけたことが周囲の知るところとなり (ch. 6)、リスpekタブルな家庭の娘のすることではないと非難され、精神的に混乱した結果、脳炎の発作を起こすこと、さらに、従姉妹のリティシア (Laetitia Dampier) とサー・ジョンとの婚約が発覚することである。もっとも、リティシアがサー・ジョンの本心を知って身を引き、結果的にエリザベスはサー・ジョンと結ばれる。ただし、この結末は、読者の期待に添えてハッピー・エンドにすべきだという父サッカレー (William Makepeace Thackeray, 1811-63) の助言に、リッチーが従った結果だった (Schwartz-McKinzie xxxi)。リッチーは、小説冒頭で示唆していた通り、愚かで未熟なヒロインに、そのようなヴィクトリア朝的なハッピー・エンドを与えないことによって、人生についての教訓と見識を獲得させる予定だった。そのようにしてリッチーは、初恋の相手と結婚できなくても、自分自身の人生について探求した結果としての「目覚め」へとエリザベスを導く予定だったのである。それなのに、シャンクマンが分析するように、エリザベスは、サー・ジョンと結ばれることによって、自分が受けた精神的な打撃を忘れてしまい、人生についての見識を得るチャンスも、自分の生き方について探求する必要性を失ってしまった (Shankman 68) のであ

る。小説の結末部で、リッチーは、語り手のミス・ウィリアムソン (Mary Williamson) が¹⁰⁾ サー・ジョンとエリザベスの新居を眺めながら、「私はエリザベスがあの壁の中の囚人となって、鳥かごの横木に激しくぶつかり、自由になろうともがく様子を想像することができる」(Elizabeth 76) と述べる様子を書き込むことを通して、エリザベスが「目覚め」のチャンスを逃してしまったことを表している。発表された順番で言えば、『エリザベスの物語』が連載された数年後に「森の眠り姫」が『コーンヒル誌』に掲載されているが、エリザベスが「壁の中の囚人となって」いるというミス・ウィリアムソンの想像は、「目覚め」を迎える前のセシリアが、ラルワース・ホールの壁の中で生活していた (“Sleeping Beauty” 9) ことを、読者に思い出させる。ミス・ウィリアムソンが H. の友人であり、「森の眠り姫」のもう一人の語り手でもあることを合わせて考慮しても、『エリザベスの物語』と「森の眠り姫」は関連していると言える。

「目覚め」のチャンスを逃してしまったエリザベスは、実母のキャロライン (Caroline Gilmour, later Madame Stephen Tournear) が彼女にとってそうであるように、将来娘を持ったときに、適切な導き手になれない可能性が高い。「森の眠り姫」のミセス・ラルワースが自分の受けたのと同じ教育を娘セシリアにも施すことによって、セシリアを自分と同様の「眠り姫」に貶めていることは前章で述べた。すなわち、「目覚め」を果たしていない母親は、娘を「目覚め」させることができないという考えを、リッチーは『エリザベスの物語』でも提示している可能性がある。この点について、ジェランは次のように述べている。

Elizabeth is a young and passionate girl, wholly untrained by a worthless and jealous mother, almost young enough to be her sister. Both are equally incapable of self-control, both equally bent on pleasure. (Gérin 127)

ジェランはキャロラインとエリザベスが似ていることも指摘している。すなわち、キャロラインが娘と同様に未熟であると考えられることを、リッチーは、彼女が娘の思慕の対象であるサー・ジョンに想いを寄せていると設定することによって暗示している。この設定について、『エリザベスの物語』出版直後の1863年4月に匿名の書評者が酷評しているが¹¹⁾ キャロラインが結婚と出産を経験していても、女性として精神的に成熟しているとは言えないこと、したがって、母親として娘を精神的に導いたり、人生の指針を与えたりすることができないことを示唆するために、リッチーがそのように設定したと解釈すべきであろう¹²⁾

若いヒロインのロール・モデルに母親がなれないことについて、シュバルツ＝マッキンジーは、『エリザベスの物語』と『懐かしのケンジントン』(*The Old Kensington*, 1872-73)の両作を収録したペーパーバックの序文の中で、そのような例がリッチー作品に限らず、ヴィクトリア朝の小説に多く見出されると指摘している。その理由として、マッキンジーは、急激な変化の時代であった当時、母と娘の意識の間には大きな隔たりがあり、それ以前に見られたような母と娘の関係を築きにくくなっていたためだと説明している。

The prevalence of “bad” mothers in Victorian literature has been interpreted as an indication of heightened tension between generations of women whose opportunities and values were changing with the times. *Elizabeth* and *Old Kensington* illustrate this tension at the same time that they place terrific value on the ability of mature women to guide their less experienced friends. While both heroines are required to surpass the attitudes of mothers who understand and evaluate themselves (and their daughters) only in terms of their relationships with men, the maiden aunts and widows to whom they turn are content live independently, without husbands. (Schwartz-McKinzie xxvii)

19世紀の半ばにおいて、母親と娘各々が育った時代の世相の違い、もしくは恋愛や結婚に関する経験の違いから、娘が母親を手本にすることができない例は多々あっただろうと推測されるが、リッチーが『エリザベスの物語』や「森の眠り姫」で母と娘の類似性を描いていること——キャロラインとエリザベスが共にサー・ジョンに思慕の情を寄せ、ミセス・ラルワースとセシリアが同一の教育を施されていると設定したこと——を考慮するなら、少なくともリッチー作品において、母親が娘に人生の指針を与えられずにいる理由が、世代間の隔たりにあると必ずしも断定できないであろう。さらに、どちらの場合も、母親よりもさらに年長の女性が、ヒロインにとってフェアリー・ゴッドマザー的な役割をしていることを考慮に入れても、リッチーは世代間の隔たりが引き起こす問題として、母親が娘に対してその役割を果たすことができない様子を描いているとは言い難い。

それでは、リッチー作品において、フェアリー・ゴッドマザー的な役割——すなわちヒロインに人生の指針を果たすという役割——を果たすことのできる女性の特徴は何だろうか。結論を先に言えば、「森の眠り姫」を始めとしたフェアリー・テイル・フィクションの語り手のH.やミス・ウィリアムソンのように、経済的、精神的に自立して知的な、中年期もしくは老年期の未亡人や独身女性である場合が多い。すなわち、彼女たちは、ヴィクトリア朝社会の周辺に位置しているだけではなく、キャロライン・ギルモアが、娘も愛するサー・ジョンを愛しているにもかかわらず、薄情で利己的なトゥルヌール牧師(Pasteur Tournour)と保身のために結婚するのとは異なり、男性に頼らなくても生活できる女性である場合が多い。エリザベス・ギルモアが心身への打撃から回復する過程で、優しい言葉をかけるだけではなく、行き場を失った彼女を、自分の邸宅に6週間に渡って滞在させる(ch.7)サー・ジョンの伯母ミス・ダンピエ(Jean Dampier)は、まさしくそのような女性である。「森の眠り姫」のミセス・ドーマーは、セシリアにとって実際に名付け親である(11)と同時に、60歳のときにラルワース・ホールに来て以降の20年間、人の生を超越した、

永い眠りの中にいるかのように日々を過ごしている (“Sleeping Beauty” 13)。彼女がミセス・ドーマーという眠り (dormir) を連想させる名前を持つのは、そのためであろう。リッチーが、ミセス・ドーマーをそのように描くことによって、魔女もしくは妖精といった超自然的な存在である可能性を匂わせていると考えることもできよう。リッチーが独身女性や未亡人に、ヒロインのフェアリー・ゴッドマザーという重要な役割を与えることを通して、ヴィクトリア朝社会の周辺に位置する女性が、社会の中でどのような役割を果たすことが出来るかを考察している可能性もあるが、この点については、別の機会を設けて吟味したい。

既婚であるか否かによって、女性が成熟しているかどうかを必ずしも決することが出来ないという考えを、リッチーは、彼女の最後にして最高の長編小説と評されることが多い『ミセス・ダイヤモンド』(*Mrs Dymond*, 1885) の中でも表明している。ヒロイン、スザンナ (Susanna Holcombe Dymond) は、自分よりも遥かに年上で、自分と同年代の子供を持つダイヤモンド大佐 (Colonel John Dymond) に見初められ、再婚した実母 (Mrs. Michael Marney) の借金問題の悪影響もあって、流されるように最初の結婚をしている。大佐が望む妻であろうと奮闘することによって、また、母親になることによって、スザンナは格式あるダイヤモンド家の主婦として相応しい女性に徐々に変貌していく。それでも、この段階での彼女は、ミセス・ダイヤモンドとしての外面と、まだ幼い内面に「分断されている」(divided [113]) と描写され、¹³⁾ 自分の人生についての探求を十分に行っているとは言えないことが仄めかされている。そもそも、自分自身とその家族を経済的に庇護する人物が必要だからダイヤモンド大佐と結婚した点で、スザンナは、経済的な後ろ盾が必要だという理由でトゥルヌール牧師と打算的な再婚をするキャロライン・ギルモアと大差はないと言える。ところが、スザンナは、義理の娘のテンピー (Tempy Dymond) とその恋人チャーリー (Charles Bolsover) の恋愛を間近で見守り、大佐が交通事故で死亡した後、マクスウェル・デュ・パルク (Maxwell du Parc) に惹かれるようになるうちに、

そして、パリで普仏戦争（1870-71）に巻き込まれるなど、個人の力ではどうしようもない困難を体験していくうちに、自分はどう生きるべきなのかについて探求せざるを得なくなり、「目覚め」を果たすのである。この点について、シャンクマンは次のように述べている。

With the exception of Mrs. Dymond, which is a full bildungsroman in that the heroine grows and matures into a woman, the heroines in Anny's novels reach only a partial awakening. They are passive Victorian ladies whose psyches Anny explores so that the reader understands them better than they do themselves. Anny's novels are notable for their sense of reality, for their evocation of the past, for their appreciation of nature, for their honesty, humor, and understanding of the predicament of many women in her age, and for their easy and graceful style. (Shankman 67)

結婚が物語の鍵になっているという点で、『エリザベスの物語』、「森の眠り姫」、『ミセス・ダイヤモンド』は共通している。ただし、「森の眠り姫」はセシリア・ラルワースの「目覚め」に焦点を当てながら語られているとはいえ、結婚という紋切型の、もしくはフェアリー・テイル・フィクションに相応しいハッピー・エンドで締めくくられている。『エリザベスの物語』も、ヒロインも「目覚め」のチャンスを逃してはいるが、思慕を寄せていた相手と結婚するというハッピー・エンドに到達する。その一方で、スザンナ・ダイヤモンドは、出産を経験し、最初の夫を亡くした段階から、普仏戦争という現実的な時代設定の中で、自分の人生を再構築していく様子が描かれている。マクスウェルを愛するようになることを通して、スザンナが性的な目覚めを果たしたことが匂わされていることを考慮するなら、「新しい女性」(New Woman)が誕生しつつあった19世紀の終わりにあって、『ミセス・ダイヤモンド』を、時代を先導する小説と見なすこともできよう。この点については新たな機会を設けることにして、

ここでは、リッチーが作家としての円熟期に至っても、女性の「目覚め」とは何かについて、作品の中で考察し続けていること、既婚女性が必ずしも「目覚め」を果たしているとは言えないのではないかという問いかけを、最後の長編小説の中でも読者に対して行っていることを、確認しておきたい。

3. 結 び

リッチーは十代の頃に、「私は職業を持ちたくて仕方がないのです。編み物をしたり繕い物をしたり、ただ小説を読んだりなんてしたくないのです」と書簡の中でミセス・ファンショールに訴えながら、結婚して主婦になることへの反意を示していた。それでも彼女は、比喩的な意味での女性の「眠り」と「目覚め」、それに関連する人生の探求について描くとき、『エリザベスの物語』、『森の眠り姫』、『ミセス・ダイヤモンド』以外の作品においても、結婚や恋愛を通して描いている。「青髭の鍵」の場合のように、婚約破棄が幸せな結末として描かれる場合でも、ヒロインの自己探求は結婚という問題を通して行われた。明らかに、これは、当時の女性が自己探求を行う際の選択肢が限定されていたためである。それに加え、シュバルツ＝マッキンジーが、『懐かしのケンジントン』のヒロイン、ドリー（Dorothea Vanborough）の自己探求——最初の恋人で、家父長的なロバート（Robert Henley）との婚約と別れを経て、レイバン（Frank Raban）の愛情を受け容れていく過程で否応なく行うことになる自己探求——を吟味することを通して指摘しているように、リッチーは、「感情的、知的な自由の獲得は、女性にとってラディカルな概念である必要はない」（Schwartz-Makinzie xxxi-xxxii）、結婚や恋愛という経験を通して行い得るものだという信念を、人生経験を積み、多くの女性の生き方を見聞していくうちに持つようになったためではないだろうか。「森の眠り姫」の冒頭で、語り手 H. に「お伽話は実在の人間がお姫様や王子様に喩えられて語られたものに過ぎない」と発言させたように、リッチーが創造したヒロインたちの人生は、「実在

の人間」が、フェアリー・テイル・フィクションや小説の登場人物に「喩えられて語られたもの」である。そして、「目覚め」を迎える前の段階において、ヒロインに限らず、多くの女性登場人物たちが「眠り姫」としての側面を持っている。リッチーは、彼女たちの人生の「目覚め」にかかわる問題を、結婚や恋愛を軸に描いているのである。

※本稿は、2017（平成29）年度松山大学特別研究助成の研究成果として執筆したものである。

注

- 1) フェアリー・テイル・フィクションという用語は、Heidi Anne Heiner が2010年にリッチーの再話したお伽話を編集した *The Fairy Tale Fiction of Anne Isabella Thackeray Ritchie* (SurLaLune Press) のタイトルに倣っている。
- 2) “The Sleeping Beauty in the Wood” からの引用は、*The Fairy Tale Fiction of Anne Isabella Thackeray Ritchie* (ed. Heidi Anne Heiner, place of publication unknown: SurLaMoon Press, 2010) に依拠している。
- 3) “Cinderella” からの引用は、*The Fairy Tale Fiction of Anne Isabella Thackeray Ritchie* (ed. Heidi Anne Heiner, place of publication unknown: SurLaMoon Press, 2010) に依拠している。
- 4) “Bluebeard’s Keys” からの引用は、*The Fairy Tale Fiction of Anne Isabella Thackeray Ritchie* (ed. Heidi Anne Heiner, place of publication unknown: SurLaMoon Press, 2010) に依拠している。
- 5) 未亡人と設定されている H. は、リッチーのペルソナと解釈できる Miss Williamson と共に、フェアリー・テイル・フィクションの語り手であり、彼女たちのお喋りがフェアリー・テイル・フィクションの外枠を構成している。この点については、拙論「アン・サッカレー・リッチーの自覚とフェアリー・テイル・フィクションの枠組み」（『松山大学論集』第29巻第5号, pp. 119-135）を参照。
- 6) リッチーは労働者階級の少女たちを教育と、経済的に自立する端緒を開かせることの重要性についても、エッセイの中で主張している。例えば、『とある島から』（*From an Island: A Short Story and Some Essays* [Leipzig: Bernhard Tauchnitz, 1877]）に収録された「あらゆる雑務に携わるメイドたちと公式報告書」（“Maids-of-all-Work and Blue Books”）では、リスペクタブルな上流階級のお屋敷で働くメイドではなく、都市の俗悪な労働環境において「あらゆる雑務に携わるメイド」になるであろう少女たちが、慈善学校（pauper schools）で受ける「身体、道徳、家事に関する訓練」（the physical, moral, and domestic training）に注

意を払うべきだと主張している (253-55)。その上で、リッチーは、そのような少女たちに十分な教育を与え、幸福な人生を送ることができるよう導くのは現実的に不可能だという回答を、30年に渡って監督者の立場にいる女性 (Matron) や公式文書から得たと記している (257)。さらに彼女は、孤児か、そうでなければ親に子供を保護する能力が欠如しているために救貧院に入れられた少女たちよりも、14歳か15歳くらいまで自宅で過ごした少女たちの方が生気に満ち、教育しやすいという学校関係者の話 (276) や、一定の教育期間を経て奉公に出た後も、少女たちを監督および指導する仕組みが必要ではないかという意見を紹介しながら、労働者階級の少女たちの教育機関での現状や将来に目を向けるよう、読者に訴えている。

- 7) 「ブライトンのエーゲリア」は、『ブラックスティック・ペーパーズ』に掲載された、その他のエッセイと同様に、サッカレーの『バラと指輪』(*The Rose and the Ring*, 1854) に登場する妖精で、「古本、若い人、実践的な指導を行う学校、指輪、バラ、感傷的なこと」(1) を好むブラックスティックの傾向に言及しながら、リッチーが自分の考えを表現したエッセイである。このエッセイ集に収録された「セント・アンドルーズ」(“St. Andrews”) では、執筆時の1901年において既に男女共学だった同大学の女子寮の環境がよいことと、寮費が手頃なことを、ブラックスティックが寮母 (Warden of University Hall) になりたがるほどだと、冗談を絡めながら称えている (39-40)。続けてリッチーは、セント・アンドルーズ大学と同様に、付属のセント・キャサリン校なども女子教育に積極的であることを称賛し、「眠り」や「目覚め」に関連する比喩を使用していないが、これらの教育機関で女子学生が嬉々として勉学に励んでいることを記して、このエッセイを締めくくっている。なお、イギリスのエーゲリアとしてリッチーが挙げ、その功績を称えているのは、イギリス初の女性医師であり、医学校の学部長として女子教育に従事したギャレット・アンダーソン (Elizabeth Garret Anderson, 1836-1917) である。
- 8) “Egeria in Brighton” からの引用は、*Blackstick Papers* (London: Smith, Elder, 1908) に依拠している。
- 9) 『エリザベスの物語』からの引用は、*The Story of Elizabeth with Other Tales and Sketches* (Boston; Fields, Osgood, 1869) に依拠している。
- 10) ミス・ウィリアムソンは、フェアリー・テイル・フィクションや『エリザベスの物語』など、多くのリッチー作品に、一人称の語り手として登場する。この人物については、注5を参照。
- 11) Anon, “Review of *The Story of Elizabeth*,” *Athenaeum* 41 (25 April 1863): 552-53.
- 12) シャンクマンもこの書評を引用 (“[The] reviewer found that it ‘turns upon a subject which is, or ought to be, quite inadmissible for a novel: the antagonism of a mother and daughter, both rivals for the love of the same man [...] it trenches on the sins of incest’”) し、書評者はリッチーの意図を理解していないと批判している (Shankman 67)。
- 13) *Mrs. Dymond* からの引用は、*Mrs. Dymond* (Stroud: Sutton, 1997) に依拠している。

引用文献

- Anon. "Review of *The Story of Elizabeth*." *Athenaeum* 41 (25 April 1863) : 552-53.
- Gérin, Winifred. *Anne Thackeray Ritchie : A Biography*. Oxford : Oxford UP, 1981.
- MacKay, Carol Hanbery *Creative Negativity : Four Victorian Exemplars of the Female Quest*. Stanford : Stanford UP, 2001.
- Ritchie, Anne Thackeray. *Blackstick Papers*. London : Smith, Elder, 1908.
- . *The Fairy Tale Fiction of Anne Isabella Thackeray Ritchie*. ed. Heidi Anne Heiner. place of publication unknown : SurLaMoon Press, 2010.
- . *From an Island : A Short Story and Some Essays*. Leipzig : Bernhard Tauchnitz, 1877.
- . *Mrs. Dymond*. 1885 ; Stroud : Sutton, 1997.
- . *The Story of Elizabeth with Other Tales and Sketches*. Boston ; Fields, Osgood, 1869.
- Schwartz-McKinzie, Esther. "Introduction." *Mrs. Dymond* by Anne Thackeray Ritchie. Stroud : Sutton, 1997. v-xxxii.
- Shankman, Lillian F. "Introduction : 1852-1858." *Anne Thackeray Ritchie Journals and Letters*. Columbus, Ohio State UP, 1994. 27-36.
- . "Introduction : 1859-1863." *Anne Thackeray Ritchie Journals and Letters*. Columbus, Ohio State UP, 1994. 59-70.
- Zipes, Jack. "Introduction." *Victorian Fairy Tales : The Revolt of the Fairies and Elves*. New York : Methuen, 1987. xiii-xxix.